CO-OP

This notebook is made of
excellent CO-OP original paper.

No. 2

中华人民共和国訪問 紀誌

1968.1.6 ～ 2.26

日本社会党
国会議員秘書学習訪中団

坪井隆治

V
B4
50

2月

9日　長沙 ⟶ 南昌

午前中　自修大学跡参観
迎賓館のすぐ隣にある。毛主席ゆかりの大学。(特殊学校)
すぐに長沙空港に向うも、空港で飛行機待ち約4時間。
天候の都合で遅延。　昼食も空港でとり、1時すぎ出発。
南昌空港着3時。　南昌は江西省の首都にして、南昌蜂起
などで知られたところ。
夕食は江西迎賓館(宿泊のホテル)にて江西省革命委員会
責任者の招待宴あり。
この迎賓館は立派な近代的ホテルで、8階建ての大きなもの。
但し、今はシーズンオフとあって、他に宿泊者はいない様子。
ホテルの接待員、炊事員とも仲よくなり、きさくだ。

10日　南昌

午前中、「景德鎮」の陶器の産地は、すぐこの近くに在る。
それで、南昌市内の焼物専門店に案内してもらう。
とにかくその買物ぶりは こちらがびっくりした。
先ず二台の自動車で市内の多分一番の目抜き通りだと思うが、左程大きい店というわけではなく、日本でも普通に見られる、大きい方の専門店だが、この南昌市内は、人々で賑っている。
地方都市で、この江西省の首都らしく、近在から出かけて来た、いわば「オ上りサン」のような人たちが大勢 街に あふれていると いった感じだ。
それで、我々のオ召シ車が人波を抜けると、その辺を歩いている人たちが、ワットばかりに集って、かけ寄って窓の外から車に触れんばかりにして のぞきこむ。　それが1回だけではなく車が通り抜ける沿道ずっとなのだから驚いた。　この街ではオ上に車はほとんど見当らないから、特別な人間のが オ乗リニナッテイル、とでも思ったらしい。　又、店に着いてからが大変だ。
我々が車を下り店には入ってゆこうとすると、集った群衆――恐らく200人ぐらいはいたであろうか。――が、サット道をあける。
我々は半ば緊張し、半ば不安に、それでも生れて始めて少し気取った？ サマをして店に入る。　すると たいして広くもない店内に、我々の後からドットと はいる。　我々は、押エた金さんも、寧さんも陳さんも皆 ばらばらになって、一方は分かれ分かれ、ホウホウのていで奥まった一室（特別陳列室）に逃げこんだ。　とにかくゆっくり店内の品物の品定めもどころではない。
それで一時店内の人たちを制限してもらって買物をする。
後で聞くと、寧さんも眼がねをかけているものだから、日本人と間違われて通訳したと例の広言で話していた。
さすがに本場だけあって、芸術品から、普段の物まで、良質の物が揃っている。　スープ碗5ケと黒い砂糖ツボを買う。

一個の値段を思って、それでも良いものだと思って買ったら、2個も包んでくれるので、1個だけだと云うと、一寸になっていると云うので、宿舎に帰ってから、1個は、平塚氏に渡すことにした。
店のご主人が、景德鎮の由来から、いろいろ説明してくれた。

特徴
1、白い。
2、明るい。
3、薄い。
4、音色がよい。

午後　李文忠のいた部隊くは、この軍団に所属していたので、その中隊の人たち――事件のとき、一緒にいた人たち、李文忠の弟、（今は志願して兄の志を継いで解放軍にはいっている。）そして、その時救助された紅衛兵――可愛らしい まだ オサゲ髪の少女たちと、ホテルで座談会。
日本側からの話ということで、今一番具体的な話題となっているのは、沖縄解放だということで、小生が約3分ぐらい説明した。
余りサエナイ説明しかできなかった。

夜　小生と黒田氏（彼とはいつも宿泊の際には二人同室ということにした）の部屋に、金蘇域さんが訪ねてきてくれて、二時間ぐらい、個人的問題、思想的なことなど、形式ばらずに、話しあった。

遭難した船には3名の紅衛兵が乗っていた。

〔李文忠のいた第6中隊 ― 第4小隊との座談会〕

英雄的な業績を紹介する。
三支両軍の任務を各地で遂行してきた。革命的左派を支持し、まじめに学び、学ってきた。そして次のことを実行してきた。
毛主席の熱愛するものを愛し、
〃 支持 〃 支持し、
〃 指示どおりに運び、
〃 が手を挙げれば前進する。
身を以って実行した。即ち8月19日、章貢江を渡るとき、大波に遭遇した。紅衛兵に身を以って示したのです。
66.8.19、庶朋生は8名を救った。
(当時は班長、今は小隊長)
李__さんは飛びこんで救出った。
李從全副班長は泳ぎは達者でなかったが、板切れにすがって助けた。しかし疲れて、もっていた板切れを紅衛兵に渡して犠牲となった。
共産党員陳佃富は退院後2日目だったが、紅衛兵輸送をかってでていたが、1人又1人と助けた。そして激流にまかれて犠牲となった。
陳同志は陸でも真面目であった。
小隊長、党員李文忠は紅い心の同志だった。
危険を顧りみず5名を助けた。疲れきっていたので深夫沈みしていた。
余徳祥同志は、小隊長を救いにいった。すると「私にかまうな、紅衛兵を救え!」といって激流に沈んでいった。余徳祥はこれを救って力がでてきたが、それでも最後は犠牲となった。
この李文忠の革命的最後の言葉は毛主席の教えが光り輝いている。
これは中国のフルシチョフ、ちうちり者の哲学 ― 唯命哲学に横ヅラビンタをクラわしている。
ソ連修正主義にも同じようにビンタをクラわしている。ソ修は、アメ帝の前に屈している。中国人民解放軍は毛主席の教えを守って世界人民の斗争を支持し、人民革命に尽くします。
20分間の救助作業によって20名ぐらいの紅衛兵が救助された。
しかし、戦士李文忠、李從全、陳佃富の三人は犠牲となった。
これは「泰山よりも死が重かった」ことである。
中国人民に対し、毛思想に対し、毛主席に忠誠をつくす模範となった。
彼等は一分たりとも、ことあるごとに毛主席の指示どおり学習していたからです。
毛主席の革命路線を守ることについて、天が地が裂けようとも変らなかった。
英雄的行動で以って、鋼鉄のような心を示したのです。
或る夜、毛主席が紅衛兵に接見した映画をみて感激し、涙を流していた。
その夜は仲々眠つかれず、「毛主席があのように健康なのは、全世界人民のためによいことだ」と話し合って、又「毛主席があのように紅衛兵を愛しているから、我々も紅衛兵を愛しよう。」とも云っていた。
李文忠小隊長は、涙を流し、ホホエミをうかべ、かすかに「毛主席、〃!」と夢みていた。
これは、李同志が普段から著作をよみ、頭の中に毛思想を樹立していたからです。
李文忠隊長は、胸に祖国を、心は世界をみつめていた。彼は徹底した国際主義の革命家です。国内だけでなく、国際主義の革命戦士になるように隊員にいつも教えていた。ある日、世界地図を示して「まだ3/4の人々が未解放の苦しみをうけている。Africa、L. Americaに於ても、帝国主義が我々の人民を虐殺している。ソ連ではコスイギン、フルシチョフが、十月革命をうち切って走資への道を進んでいる。日本、台湾、ベトナムでは、軍国主義が我々の住民を蹂躙している。」
「Proletariatは、全人類を解放しなければならぬ。そうしなければProletaは自分自身をも解放することはできない。」
皆こうして彼の教えによって、国際主義を身につけ、いつでも生命を捧げる決意をした。

李文忠がこうした思想を身をもつようになったもう一つの理由は、
自分の魂の深いところで、公を樹立してきたからです。私心は腐敗の基だ。
毛主席に忠節を念ずるならば、心奥深いところで私心と訣別しなければならぬ。彼は私心雑念に対し、こっぴどく叱りだし、こっぴどく斗っていた。
こうして部下の批判をうけ入れ、五つのこだわらないことを示していた。

(1) 批判されたときは、その場——会議であろうとなかろうと、昼かろうと人がすくなかろうと。
(2) 誰が批判しようと、すぐに改める。
(3) その批判が自分によかろうと悪ろうと、トゲのある批判であろうとなかろうと、十分に聞くということ。
(4) その批判の量が多かろうと少なかろうと。
(5) 批判の方式にこだわらない。——面と向って批判されようと、陰で云われようと。

つまり、こうして彼は人民の利益のために批判をうけいれてきたのです。
彼はこのように努力することによって、若くして、大公の高い徳に上ったのです。
Proletariat革命の先進分子となったのです。
全世界は毛思想を模倣しようとする時代に入った。
この英雄的小隊の行動と李文忠同志によって、中千小隊はその行動を全うすることができたのです。
こうして、麦ケン得、王ヨウカイ、年四旺、蔡栄祥、王ケン、好中八中隊、好中六中隊、鋼鉄第一中隊。

林彪が軍を指揮するようになって、Proletaria路線の政治優先が確立されたからです。没私立公の精神なのです。

〔救助された紅衛兵——女子中学生の話〕

南昌第15中学校在学、15才

中千小隊の人たちは、毛主席のために生き、死ぬときは本当に毛主席のために死んだのです。
66.8.19日、中千小隊の人は我々を輸送する任務を負ってくれた。
舟で渡るとき兵隊さん達は歌をうたってくれた。その時乗船の直前、「我々は左派を支持する！」の歌をうたってくれた。又最高指示も学んだ。
波が荒く舟はへ先から水を被り、私たちは激流の中に落ちていった。
もうお終いだと思って、オキ、オ、オキ！と叫んだ。
この声は解放軍の人たちを勇気づけた。その時語録の「決意を固め、犠牲をおそれず、困難と斗おう！」の声が上り、私たちを救ってくれた。
李從利同志の「毛主席を守るためなら紅衛兵を守るためなら幾千回死んでも本望だ」を思いだします。
彼はあまり泳ぎが上手でなかった、力つきて持っていた板切れを紅衛兵に渡して死んでいった。そして最後の言葉を思いだします。
——王ケツに学び、ひたすら革命のためにつくす、
(1)に苦しみを惜しまず、(2)に死を惜しまず、いつでも革命のために死ぬ準備をしています。
陳伯斎は病後で、三人目を救おうとして激流の中にのまれて死んでいった。
又李文忠の言葉を忘れない。
——生きるには人民のために生き、死ぬには人民のために死ぬ。
彼は五名を救い上げ、三名を押しながら舟にそって泳いでいた。
最後に「自分にかまうな！」と云った。
このように李同志は死の瞬間まで人民のことを考えていたのです。
私たちは救われて、河面をみて、いつまでも立ちつくしていた。
もう一度李隊長たちが浮び上ることを期待したのです。
しかしダメでした。
彼等に対する感謝の言葉はいくら語っても云い表わせるものではありません。

李同志の「私にかまうな！」は私たち全部の言葉であり、修正主義者に対するピシャであります。この言葉は毛思想に武装されたものだけが言える言葉です。そして又毛思想の光りと、公という字の偉大なことを示しています。
この革命精神があれば決して敵の前で屈服しないでしょう。
私たちはこの偉大な言葉と事業を受け継ぎます。
この言葉に自分を照らし、自分の心の中のBourgeoisie と闘い、自分の私心と闘いたいと思います。毛主席の指示に従い、しっかり文革をやりぬく覚悟です。

〔李文紅 ― 李文忠の実弟の話〕

19才、兄李文忠が亡くなった後、志願して入営した。
兄や弟の志を継ぐために志願して任務についた。
世界人民の圧迫をうけている人々のために任務を遂行したい。
毛思想を体得すれば、どんなことも克服できる。偉大な毛主席の指示の下に、全世界の同志と結合して、その解放につくしたい。

それぞれ、三人とも最後の一文字を変えた。

李文孝 ⟶ 紅
李從義 ⟶ 紐
陳佃甲 ⟶ 矢

11日　南昌 ⟶ 吉安 …… 井岡山へ向かう。

朝、自動車三台にて井岡山参観への旅に出発。
自身の廻りの荷物だけ下げて、又この南昌に5日後には帰る。
猛スピードで、村を抜け、山を上り、下り、原野を走り抜けて、
午後3時すぎ、吉安市（キッケヤン）到着

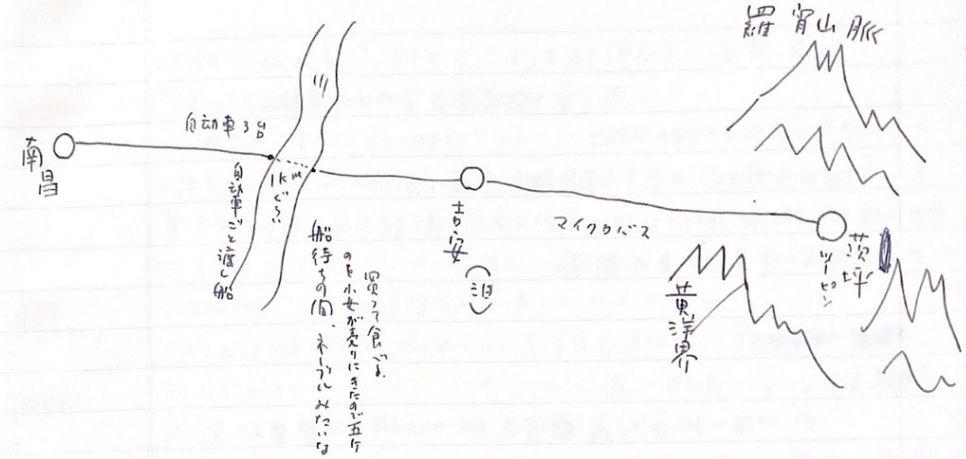
井岡山までの道は遠いので、普通もここで一泊する。
割合に寒くなく、日中の陽差しは弱いが、日本での冬の寒い日と大体同じ。しかし、夜は冷え込む。
暖房の設備などはなく、夜は大きい火ばちに木炭を沢山いれて、足あぶり、手あぶりする。
このホテルは、構内は広いが、建物は一階建ての20間ぐらいある。玄関のワキに大きい楠の木があるのが印象的だ。
吉安市は、吉安県の首都で、この地方にしては大きい街である。
ホテルは、街はずれに在る。
すぐ下手の方には大きい川があり、土堤があり、そこいらに日本と同じような家庭野菜畑があり、ネギ、大根、ホーレンソー、小松菜などが青々としており、日本と同じだ。
このホーレン草をおしたしにして食べたくなった。
一時間ぐらい、夕才保田氏と二人で散歩する。
公園の一隅に小さい寺院らしきものあり。どうなっているだろうと思って、のぞいてみると、中には仏像も何もなく、文革のスローガンが、壁面一杯に書かれている。
公園で、幼児が数人遊んでいる。丁度かかのやちゃんぐらいの子だ、丸々とした綿入れの服を着て、鼻をたらしている。人なつこく寄ってくる。
運動場では大人や子供が走り廻っている。青年数人が寄ってきたので筆談をする。中国の外套を着ているので、我々が日本人とは判じ難いのであろう。
夜は寧さんが遊びにきて、談笑する。庁言なので話しぶりが面白い。
夕食にでた特製のフカシパン（甘味）は美味しかった。

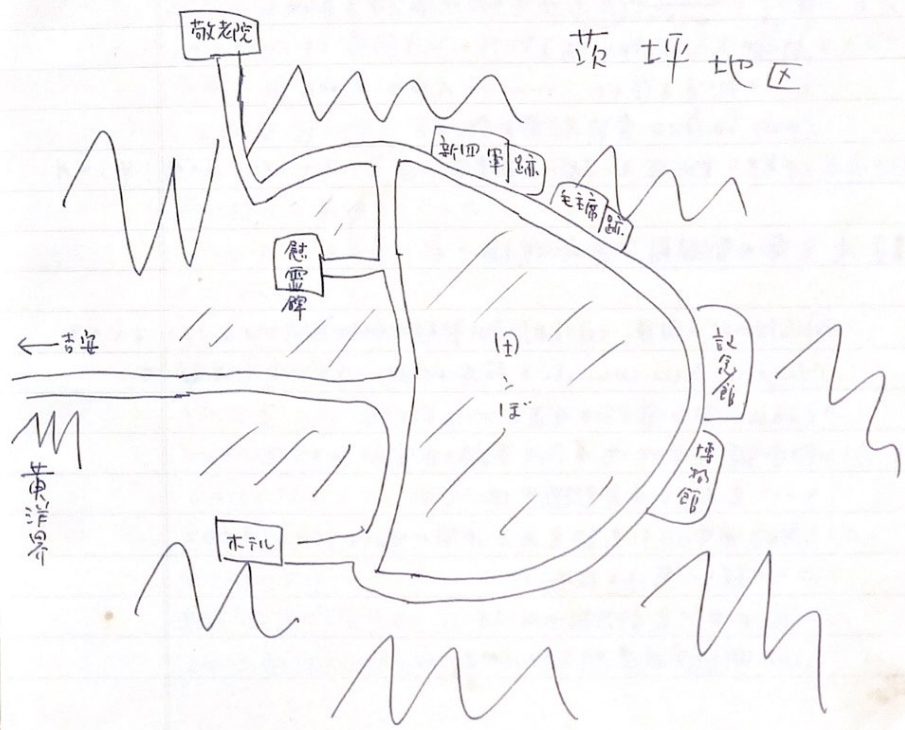
12日　吉安 ⟶ 井岡山

朝、8時 マイクロバスに全員のり 井岡山へ向けて出発。
だんだんに、集落がすくなくなり、あっても小さな部落で、山岳地帯に入ってゆくのが分る。　井岡山に登ってゆくのが分るようになる。
井岡山といっても一つの山でなく、幾つもの山脈が集っている。
これを総して 井岡山といっているようだ。
途中山内に入り、けわしい山ばかりになり、登り一本で、マイクロバスは、ウーウー ヒナリッパナシである。　ところどころにアーケードのアーチ内があって、……の内と番号とスローガンがしるされている。
午後2時すぎ、四方を山で囲まれた、盆地に着く。　1K四方ぐらいの盆地で、真中は田んぼがあり、四面に、ホテル、記念館、などの建物が建ち並んでる。　ここが井岡山の中心地 茨坪 である。
その中の隅の方にある、一番立派なホテルに入る。
5階建ての大きなホテルで、昔は年前、毛主席が来たときも、このホテルに宿泊した由。　盆地の真中に小高い丘があり、解放戦争の犠牲者慰霊碑が高くそびえているのが目立つ。
夕方 茨坪地区革命会の人から講話をうく。

茨坪の入口ちかくにある、黄洋界（激戦のあった有名な戦場―山）の山が見える。山の中腹に、木を切り広げて書き文字がしてあるのが見える ―― 毛主席万歳 ――
（京都の大文字焼と同じ仕方）

夕方から井岡山についての講話。





〔井岡山について〕

茨坪地区委員会の人の講話

次の三つの項目に分けて話す。

1. 毛主席は世界唯一の正しい革命~~[illegible]~~理論を創造した。
2. 井岡山に根拠地を設けた。
3. 井岡山斗争の歴史的意義

~~概況~~

〔概況〕

四つの省にまたがり羅霄山脈の中間に位置する。

六つの県 —— 当時は約100万人

茨坪 —— 45km —— ○ の二つの主要な軍事基地
(スーピン)

周囲は275kmある。

五つの根拠地を作った。—— この人口は2.000人

1927.10 初め 労農赤軍を率いて

1929. 主力軍と一緒に福建省に進軍していった。その間1年3ヶ月。

I、毛主席の普遍的な正しい理論

国内的には半封建、国外的には半植民地の中国では如何にすべきか

Marx は Paris commun を指導したが、70日間で失敗した。

Lenin は一国で10月革命に成功した。

中国のような土地での革命の経験は皆無だった。

そこに毛主席は革命を創造したのです。

終始一貫して M.L 主義を中国に適用し、研究してきた。

二つの輝いた著作を表わした。

① 中国社会各階級の分析

② 湖南農民運動工作方法

この中に「誰が敵か、誰が友人か」を教えている。

「反動 Bourgeois …… 諸表 P.18」

帝国主義、官僚主義の抑圧をうけていた全国80%の農民を革命の中心としようとした。これは陳独秀の右日和見主義に反駁したことです。

当時毛主席は、南部数億の農民を指導していた。こうして国内で1回目の革命が勝利した。しかし党内の一部修正分子は完全に正体を表わしていなかった。そして投降主義の道へと進んでいった。

1926年初 蔣のチンガンカン反革命事件を弁護した。

1927.4.25、5.21、7.—? に蔣、汪精衛は、上海、武漢で反革命を起した。共産党を虐殺した。

こういった歴史的要のときに、陳一派は布令をだし、労農に武装解除を命じた。このとき劉少奇も舞台にでてきて陳に賛成した。

蔣を始めとする帝国主義の代理人は、共産主義の果実をもぎとり、支配を延ばしていった。

この数年間の間に60万の党員、人民が虐殺されている。

しかし、広汎な人民の中にある同志は、死体を埋め、革命の旗を高く掲げて前進していった。

1927.8.1 毛主席に導かれて南昌の武装蜂起をやり、反革命に一発をくらわした。

しかしこの南昌蜂起は毛主席の指導に完全にそわなかった。

農民と結合していなかったのです。

その結果8.1南下するとき、敵の狙撃に会い失敗した。

それに相次いで党中央は武漢で8.7中央緊急会議を開いた。

毛主席の努力により陳路線を粛清した。

土地革命を行い、武力で反革命を制圧する路線を決定したが、なお毛主席の主張に完全でなかった。

即ち 左翼冒険主義の道を進んだのです。

これは長期性、艱難性について認識が不足していた。

組織でも行きすぎたセクト主義がみられ、労組に一揆的ストライキを迫った。
この状況を右日和見主義は敵にひざまづき、又左日和見主義は都市の暴動にばかり走っていた。　この状況下で敏速に党が解答を与えなければどうなるでしょう。　このとき毛主席が解明したのです。
毛主席は一方で左日和見主義を攻撃し、又一方では中国の情勢を科学的に分析したのです。
毛主席は南部の農民運動の経験に基いて、農村に革命の根拠地を作り上げるべきである。　この方針に基いて1928.9 秋収蜂起を行ったのです。
この斗争の成功と同時に毛主席は、江西、湖南にまたがって労農革命軍第一軍第1師団を結成した。
そして井岡山にはいってきたのです。　毛主席は前敵委員会書記となった。

井岡山を初めての根拠地として選んだ条件は何であったか

(1) この地区の大衆組織がよかった。
労会、婦人会、農会が革命組織を作っていた。労働者糾察隊、農民自衛隊、を組織していた。　農民は900丁の銃を所持していた。
この地区の革命大衆は第1回革命斗争のときの経験が豊富であった。
即ち失敗後この地方は弾圧され、党の組織は破壊され、暗黒であった。　しかしこの地区の革命大衆は鋼鉄の指導があれば、すぐにでも火を燃え上らせる条件にあったのです。
総括していえば、大衆の基礎をもつかどうかは決定的要素である。

(2) 地区の活動は周囲の県に影響を与えていた。
後日毛主席はこう云っている。―― 羅宵山脈を自分は歩き廻った。北側は中部に比して守るにまく、攻めるにもまし、又武漢に近い。
南側は地形はよいが大衆の基礎が不足している。革命の影響もすくない。

(3) 敵の矛盾を利用して支配するのに有利である。
各県、各省の境目にあり、比較的目が届かない所である。
敵の内部の不調和を利用して、湖南、江西、広東省にゲリラ戦をすることが可能である。

(4) 部隊の自給に有利である。
人口2,000人足らずで、食糧も下から運んでこなければならなかったが、辛抱さえすれば、何とか自給できる。
当時は15Kmも歩けば道がない状況でした。

後で革命根拠地の条件を総括して、

① 非常によい大衆
② 〃 党
③ かなりの力をもつ赤軍
④ 十分な経済自給力
⑤ 戦斗に有利な地形

} が必要であった

しかし実際には人間の条件が絶対であり、毛思想が必要であったと思います。
つまるところ、人間の要素が第1である。

武装による政権斗争を行ってきた。
それは革命、建軍の歴史に於て偉大な歴史的意義がある。
井岡山に進軍したことは、革命路線を農村に置いたことであり、M.L.主義の宝庫を豊かにしたことであり、このことは毛思想の勝利です。

Ⅱ. 井岡山の革命根拠地

1. 根拠地の初期時代（できたとき）1927.10〜28.3
2. 〃 全盛時代 1928.4〜28.7
3. 八月の失敗を挽回し発展した 1928.8〜29.1

1. 根拠地の初期時代 1927.10〜28.3

1927.9.19 秋収蜂起のあと、湘阳県の文化市から進軍し、萍郷県、蓮花県、＿＿を通って10月初めサンワンに到着した。
この文化市からサンワンに到るまでのことを総括し、軍隊を再編成した。
人民にいかにして奉仕するかは建軍の課題でした。
この軍隊は主として三方面から来ていた。

① 武汉のケイエイガンの部隊
② 安源の労炭砿労働者、紅衛隊からきている人たち。
③ 萍郷県、湘阳県の農民及び労働インテリ、主たる構成員は農民であった。

左、右の誤った思想を全軍はまだ克服してなかった。
だから毛主席の農村根拠地に疑いをもっていた。農村とくに山奥でM.L.主义が生まれる筈はない、と思っていた。革命の失敗で悲观して失望していた。
進軍の途次敵に狙撃されたりして失意していたものもいた。
秋収蜂起のとき、部隊は4,000とも8,000ともいわれているが、1,000人足らずの人たちしか入山しなかった。
しかし、この人たちは中国革命の原动力であった。
大きな問題は党の力が弱かったことにある。

(1) 部隊の中で党を建設すること。
一貫して普通の戦士の姿で表われ（毛主席が？）党員となるべき人を探した。
部隊がサンワンに着いたときには4：1の割合で（4人に1人）党員がいた。
党の支部を中隊単位にした。分隊、小隊には小組を作り、大隊以上には委員会をおいた。中隊以上には党の代表をおいた——政治指导员。
こうして党の絶对的指导の下に軍をおいたから、強固として団結した。

(2) 部隊を組織すること。
大隊——中隊——小隊
指揮員を指名し、余った干部は干部員として負傷兵を分けた。
革命の種をまくために、部隊の一部の人を帰郷させオルグをさせた。
こうして戦斗力は強くなった。

(3) 部隊内で民主主义の制度を確立させること。
兵士委員会を作り、政治的には平等とした。
政、軍、経で民主的にした。
殴ったり、ドナったり、スコラ哲学の礼儀を全廃した。
この正しい政策は将校、兵の関係をなくした。
特に捕虜となった兵士は基本から解放されたと思った。
これは部隊内での民主主义があるからだ。
再編成は我軍の基礎作りだったのです。
こうして強力な人民軍隊となっていったのです。
このような一連の毛主席の指导は毛思想の表われです。
これらの軍隊は寧岡県の[illegible]に入り、会議をひらくことになる。
これが有名なコジョウ（コジョウ）会議です。
① 党を主要な地位におく、② 土地革命を行う、③ 井岡山を根拠地にする、④ ゲリラ戦を使う。
以上のことをこの会議で決定した。
当時、井岡山の上には王佐、下には袁文才の部隊があり、陳炳秀の武装解除の命令をきかずに郷里に帰っていたのでした。
彼等は本来農民自衛軍であったが、統制中に服せず井の中のカワズで行動していた。

左日和見主義は、この小さな部隊を飲み込んでしまえと主張した。
しかし、毛主席は政治面で団結、教育を与え改造すべきである、といって
余った100丁の銃を与え、干部を派遣して、又毛主席自身も出かけて
いって講話をし教育した。
約4ヶ月の改造の結果、28.1月赤軍に率先して入ってきた。
第2連隊に編成され、王佐、袁文才は後に入党した。
ゲリラ戦の中心任務は二つある。
① 根拠地の確立 ----- 附近の土豪劣紳を懲しめる。
② 大衆を深く動員すること。
茨ケ竹山に27.10月一応ゲリラを終えて落ちつき、三大規律を制定した。
思想的に人民軍を固めるため。

三大規律

1. 全軍は指揮に従うこと。
2. 土豪劣紳からの分捕品は公に返すこと。
3. 人民の物は芋ひとつ盗うないこと。

10月に入って、蔣の軍隊と一戦を交える。
一個大隊を茶陵県に派遣して敵を殲滅に行かせた。
しかしこの部隊は初めて毛主席の下を離れて都市を攻撃に行った。
この部隊の欠点は、
① 大衆を動員せず、軍事動員にばかり重点をおいた。
② 必要な軍備品は商人に調達してもらっていた。
③ 茶陵県に人民委員会を作ったが、古い規定を使っていたので、大衆から遊離していた。
毛主席はこの三つの欠点を指摘して、改善を指示した。
新たに茶陵県労農委員会を作らせた。
12月になると、この部隊は ~~[illegible]~~ 酃市に戻る。
そこで、~~全軍~~ 全軍に三大任務を提示した。

枪 — 棍

~~[illegible]~~ 人民軍の三大任務

三大任務

1. 敵を消滅すること。
2. 土豪 ~~劣紳~~ を懲らしめ金品を収めること。
3. 大衆に宣伝し、大衆を組織し、労農軍を樹立すること。

我軍は戦うだけの軍隊ではなく、大衆に宣伝する工作隊がなくてはならぬ、と毛主席は強調した。もしこの工作を怠るならば、
建軍の意義も、任務もなくなると云った。
こうして、軍隊を、生産、工作、軍事の任務に就かせた。
1928.1.5 三大任務を広汎な人民に宣伝するために遂川県に自らでかけた。
小隊、分隊を1単位として工作させた。しかし遂川県の人たちは革命戦争でうちひしがれ、残っているものは家を守るだけの人しかいなかった。
その後大衆は解散され帰村してきたが、仲々理解せず、土地改革ができるかどうかを危ぶんだ。
嘗って情勢はすばらしかったときに、土地を取り戻したが、その後革命軍が投降主義を採った際、元に戻って、土地ばかりか人間まで殺されたので、恐がっていたからです。
この辺区の斗争は軍事斗争である。従って武装しなければならぬ、毛主席は、といって
干部を養成して、自ら地方の労農政府を樹立し、自衛隊、婦人隊、
青少年隊etc.を作っていった。
農民たちに~~は~~すくなくとも1本の枪、刀を与えた。この辺区の活動に自ら指揮したために、この辺区の党員~~は~~数は約10.000人、銃は800丁。
大衆の自覚も高まった。
今次の~~Pro~~Pro.文革に於ても大衆が動員されたと云っているが、このように、同様のことが云えると思う。
当時大衆動員の結果、28.1.24 遂川県労農民政府の樹立を宣言した。その席上選挙を行い、農民を主席に選んだ。
このことは数千年来の封建社会の中から初めて農民が政治の舞台にでてきた意義あることだった。

この後、大項目の注意事項を部隊に示した。

八項注意

① 木の内を作った後は返すように。
② 泊るとき、借りた藁は元の処へ返すこと。
③ 話は穏やかに。
④ 売買は公正に。
⑤ 借りたものは返せ。
⑥ 物を壊したら倍償せよ。

なお、後日大衆の意見もいれて次の2項を追加した。

⑦ 捕虜を虐待しないこと。
⑧ 婦人をからかわないこと。

以上のことからも分るように、軍隊を人民の上におくのでなく、人民の中においたのです。

遂川県の情勢はすばらしく、江西省にも影響をあたえた。

江西省の反動派は遂川県に攻めてきたが、——当時寧岡県シンジョウには800人ぐらいの反動軍隊がいた。——そのとき、大衆組織には地下にもぐるよう指導した。そして毛主席はこれを殲滅するために二ケ連隊を動員して、1928.2.13.自ら8,000人の大衆を動員して敵をとりまき、一網にして殲滅した。又そのとき寧岡県長張甫阳を生捕りにした。

戦略面では敵を軽く見、戦術面では敵を重く見るという「人民戦争」の原則を実行したのです。

そこで寧岡県龍市で、遂川県と同じように労農政府を樹立し、張甫阳は銃殺にした。

こうして茨陵、寧岡、遂川県を一つにした連合の辺境政権を作り政権を確立していった。

このように次々と発展していたときに、党中央書記の許シュウハクと湖南地区委員会は、このすばらしい情勢をみて、プチブルの怒狂性を暴露してこの毛主席の赤軍を年末年始の戦斗に湖南省に出向かせた。

毛主席は冒険の冒険主義に反対した。しかし権力を用いて前敵委員会書記を罷免し、強引に湖南省に出軍させた。その結果「三月失敗」が起った。即ち井岡山は1ヶ月ほどの間敵に占領され、湖南省も失敗し、革命~~運動~~運動は気息奄奄のありさまとなった。

このような情況の下で、毛主席は左冒険主義と身をていして斗った。

そして湖南省に出撃した部隊を引き返して井岡山に帰り、数回にわたる戦いで井岡山を奪い返し、元のような情況にしたのです。

これらのことを通ながら、毛主席は井岡山を中心とする革命の非常に基地を作り上げていったのです。

即ち、自ら制定した武装斗争、土地革命を実行し、人民軍を創り上げていった、又党の下に軍をおいたのです。

そしてM.L.主義~~[illegible]~~のその部隊に対する指導を強めたのです。

このことは政治の面から、思想の面から、人民軍を創り出されたことを表わしたものです。

これが人民軍が革命軍としての基本的原則です。

このように三大規律、三大任務、八項注意、は大衆と党、党と軍隊、大衆と軍隊の関係を樹立したのです。

人民軍の総方針ができ上ったのです。

~~[illegible]~~このことからも、主力部隊と地方部隊の配合、地方部隊とゲリラ隊の配合、武装と非武装の配合、即ち人民戦争の原則が分ります。

このようにして左翼冒険主義の都市暴動第一主義を克服したのです。

（以上　夜の講話）

13日　井岡山

2. 根拠地の全盛時代　1928.4〜28.7

年末年始斗争失敗後、4.28 林彪の率いる部隊が寧岡県龍市に着いた。そして龍市で全軍大会を開いた。
そこで労農赤軍 第4軍 誕生を宣言し、毛主席が、その第4軍の党代表になった。　このことは蔣反動派にとっては大きな脅威となった。
蔣介石はこの第4軍結成を聞いて、あわてて これの抹殺を図り、気狂いじみた攻撃をしかけてきた。しかし毛主席の指導には勝てなかった。
当時毛主席は戦いの実践の中で、総括をした。
これは次のような70数文字でまとめられたものです。

分兵以発动群集、　集中以応敵陣。
敵進我退、　敵ヒカル我カワ。
敵疲我討、　敵退我追。
固定区域割拠、　用要波浪的推進政策。
強敵跟追、　用不疲的敵打円子政策。
很矩的時、　発动很群衆。

人民戦争の遊撃戦を漁民の網にたとえたものです。
後の戦略的攻撃、防禦はこれを発展させたものです。(72文字)
ゲリラ戦の戦略戦術を四つの言葉に総括した。

① 君は君のやりたいようにやれ。
② 私は私のやりたいようにやる。
③ 斗って勝つなら斗う。
④ ＿＿＿＿＿＿……？

「斗ッテ勝テルトキニ斗ワナイハ日和見主ギ」
「敗ケルトキニ斗ウハ冒険主ギデアル」
と林彪は云っている。

ソウシゲンの大勝利

1928.5.5 江西省の反動派（蔣の命令で）4個師団が攻めてきた。
敵をゴマカスために我々は退却した。
赤軍28連隊はコウキンに行って待ち伏せした。そしてゴトウコウまで来て敵は一挙にせん滅された。
その後、即戦即決の術を採り、北へ50km歩いて永新へ行き、一部は休養させて一部の兵力で連夜、永新を攻めて政権を作った。
蔣は懲りずに吉安から5月下旬永新へ攻めてきた。
毛主席は全軍を井岡山の根拠地まで退却させた。
1個連隊を＿＿＿？に残して阻攻作戦を採り、退却地の大泉にはゲリラ戦を備えさせた。　敵は永新を占領した。
敵の楊如軒師団長は占領祝賀会を開いていた。又楊師団長は赤軍がどこにいるかを探し廻ったが、分らなかった。
夜になると、武装ゲリラによってこっぴどくやっつけられた。
当時革命武装隊は——例えば婦人会は夜に爆竹をたべて空弾の音をだし、敵を眠らせずに悩ませた。
カイライ兵たちは師団長に対して修りの報告をした。——自分は敵を何人殺した、全滅させた、というようなこと。
これを聞いて楊師団長は喜んで、本部を永新に移した。
赤軍は精鋭をソウシゲン（永新から7km半の近い所）に一昼夜で集結させた。　敵の79連隊はこのようにして一挙にせん滅された。
そして永新に攻め入った。　そのとき楊師団長はマージャンをしていて、赤軍が攻め入ってきたことを仲々信用せず、赤軍の弾が司令部の屋根にブチ当って始めてモーゼル拳銃を手にして慌てて外にでていった。
城外は混乱状態で、指揮をとろうにも兵士は云うことをきかず、命からがら逃げていった。　これは2回目に永新を解放したときのことです。　この戦いをソウシゲンの大勝利という。
1928.6月中旬に蔣介石はこの度の敗戦にも懲りずに、江西省の軍を動員~~[illegible]~~してきた。

七溪嶺の大勝利

江西軍の7個連隊・2個師団を永新に向わせた。
又湖南省の軍閥ゴウを寧岡県に派遣し、両方から赤軍をはさみうちにしようとした。
永新に駐屯した江西軍の部隊は恐れて仲々域外にでようとせず、湖南軍も——!に負ってすぐには効けなかった。
毛主席は湖南軍——強かった——に対しては防禦を主とし、江西軍——弱かった——に対しては攻撃にでた。
江西軍7個連隊は永新に集中しているので、一挙にこれをせん滅することは困難だった。
敵は老七溪嶺と新七溪嶺の二ケ所から攻めてきた。
毛主席はマオ坪で会議をもち作戦を練った。
そして28軍を老七溪嶺へ、29・30軍の一部を新七溪嶺へ派遣し、約2万の大衆を両嶺へ動員して支援させた。
1928.6.23の端午の節句の日に勝利して二人の楊師団長を捕えて節句を迎えようというスローガンをだした。
29・30軍は真正面から敵と対決した。
28軍は動員が遅れてよい陣地を敵に占められていた。そこで攻めるか退くかの意見に分れた。
28軍第1大隊長林彪同志は意見をだして、敵の古巣(本拠?)へ敏速に攻め入るために軽武装の20数名隊を作って猛烈に追撃するよう命じた。このとき敵は七溪へ登って寺で休んでいた。この機に乗じて林彪は軽武装突撃隊で攻撃した。
敵は散りぢりになり、新七溪の退路を断つことになった。
新七溪の赤軍も攻撃に転じた。こうして一挙にせん滅して三度永新に入った。これを七溪嶺の大勝利という。
この勝利で、赤軍は武器を数えきれない程沢山鹵獲した。
今もこの地方には民謡が残って語りつがれている。
——毛委員が井岡山デ指揮ヲシタ、赤軍ハ強イ、力ヲ使ワズシテ二匹ノ楊ヲセン滅シタ、——
当時林彪は20才であった。この七溪嶺の勝利は林彪の戦術に負うところが大きい。
これらの戦いを通じての段階で土地革命も行われた。
江西、湖南省境区委員会の書記に、毛主席は選ばれた。
毛主席は土地の情況を調査し、これらの調査に従って土地分配を行った。
湖南、江西の党委員会は、この土地革命を批判し、邪魔した。
しかし毛主席はこの両省委員会に反対し、土地革命委員会を作り、問題を解決すべきであることを委員会の席上主張した。
先ず毛主席は永新県について試験的に施行した。
このようにして科学的改革の総路線を進めていった。
この路線はつまり貧農を保護し、富農を制限し、地主をせん滅し、商工業者を制限することでした。
1928年の夏に井岡山六ツの県の土地分配は一応終って豊作であった。
広汎な農民たちは、この土地闘争によって鍛えられ、生産に励み、革命に協力する偉大な勝利をあげたのでした。
1928年の冬に「土地革命の第1総路線」というレポートを毛主席は書いている。
井岡山を中心にしたこの地方の幾千万の農民の闘いは、幾千年にわたる封建制の枷を打ちくだいたのです。
このように勝利のうちに我国土地革命の基礎を樹立したのです。
そしてこのことによって敵又、敵の経済封鎖を砕く勝利をかちとったのです。敵は軍事的に我が根拠地を封鎖したばかりでなく、経済的にも圧迫を加えていた。
しかし、様々の困難な経済封鎖も毛主席の自力更生に打撃を与えることはできなかった。
赤軍の経済状態は、冬でも夏物の2枚、毛主席でも3枚の夏物で過ご

した、朝晩は毛布をかぶって過ごした、
ある兵士は ポケットの布、ズボンの下をとって ツギに当てたりした、
1928年の冬でもこの困難は続いていた、
毛主席は革命斗争の報告の中で 述べている。(P.98)
食糧、貨金についても同様であった、特に塩がすくなく、半キロで
4円もした、 5銭の貨では塩すら買えなかった、
土地の土を煮て塩を採ったほどであった、
野菜は野生のもの、当時は土豪劣紳を討たちゃとカボチャ
も食べれないと云われたものだった、
負傷兵にカボチャを食べさせるために土豪劣紳を討ちにいったもの
です、
食糧を黄洋界を山越えして毎日1人 50Kgも運んできたものです、
ある兵士は手にヒビを切れているので、レンガで精米する、
だから御飯の中にレンガの粉がはいっている、
このような困難な状況の下で赤軍将兵は歌った、
『赤イ米、カボチャノスープ、秋ノナス、非常ニ美味シイ、
毎日毎日スコシヅツ食ベル』
一枚の毛布をかぶり、下はワラを敷いた、これでは防寒は十分で
なかった、楽観的な歌をうたった、
『カワイタ藁ハ柔カク暖イ、絹蒲団ノヨウニカブッテル、
北ノ吹雪ニモ負ケズ夢ノ中ニハイル。』

当時は特に医療品が不足していた、
病気にかかる兵士は多いときは 800人もあり、医者は農村の医者、
看護婦は婦人が当番で、薬は野生の草であった、沢山のヨードを党中央に送るよう要請した、
ある兵士は負傷しても、マスイ薬がなく、手術もできず、傷口にカボチャのワタを当てて手術した、これを涼性手術と称した、

従って戦死者も多かった、
敵の経済封鎖を粉砕するため、井岡山の大衆に対し、徹底的に自力更生を説いた、
軍事機械、セッケイ所、綿製所等を作った、
工商業者を保護する政策をとり、農村での取引を奨励した、
不法な資本家には人民裁判が厳しく処断し、他の者はナンメひとつ取るのも許さない、というような布令を将兵に出した、
藻林、龍市で農村の市(イチ)を作らせた、
かつて蔣は市(市場)でも重税を課した、そこで白色地域の人たちもその市にやってきて参加し、多いときでは2万人も集った、
倹約を唱え、井岡山軍民に軍備を説いた、
油のランプの芯の使い方ですら制限をもうけた、
大隊で三本の芯を使用する、中隊では一本の芯を当番が使う、
当時の毛主席は、仕事をするにも、一本の芯だけを使い、革命の前進を指導し、沢山の著作を書いた、
「家ノ中デハ、不斤ノ油ガアッテモ二ツのランプヲ使用シナイ」
と毛主席は云っていた、
こうして偉大な勝利は経済面でも得た、
辺境地区の軍民が毛主席の偉大な方針を堅持したからです、
我国革命の最後の勝利を目指して、人材の養成を計ることにもなったのです、
「自力更生」というまとまった指令を毛主席がだすことによって、偉大な勝利をえたのです、
党中央は、赤軍は、そこの農民より生活程度は高くあるべきだと云っていた、しかし井岡山では農民よりも実態は低かった、
外国からの援助はおろか、党中央からの援助すらなかったのです、

3. 八月の失敗を挽回し、根拠地への発展. 1928.8.~1929.1

革命の道は曲折がある。冒険主義も党内で克服されていない。
許 シュウハツ を頭とする党中央、湖南省委員会は井岡山の斗いを甘く見積った。
湖南省に赤軍の主力部隊を派遣するように指示してきた。
会議をひらいて検討した。左翼冒険主義者はこの誤った指示を実行しようとした。
毛主席は云った。――モシ敵ガ井岡山ニ攻メテキタトキ、湖南省マデ進撃シテイタラ、必ズ敗レテイタデアロウ。
湖南省党委員会の指令を拒否した三ツの理由。

① 湖南省南部の年末蜂起が失敗した直後であり、暗黒支配がされている時期である。こんな時に赤軍が行ったとしても失敗するであろう。
② 年末蜂起のときは住民は食糧を処理してしまった後だった。だから赤軍は食糧を手に入れることができなかった。
③ 我軍は1年も井岡山で斗い、ここでの生活に慣れている。だから遠く進撃することは兵士が疲れて不利である。

以上のような検討の結果、思想統一をして指令を拒否したのです。
この後、赤軍は31連隊を率いて敵軍に打撃を与え、他の軍も湖南省の軍に打撃を与えた。
湖南省党委員会は、再び杜修至、楊開明を派遣してきた。
そしてこの二人は、第29連隊の帰郷观念を利用して、郴州攻撃にひっぱっていった。この結果敗れ去り、湖南省南部へ移動させた。
（この辺の詳細は P.118 参照）
もしこのとき、赤軍が敵の11個連隊を撃破して、一部の軍が湖南省南部へ行かなかったならば、この地区に革命政府を作ることができたであろうと、毛主席は云った。毛主席は赤軍主力部隊を迎えに、永新を撤退して、井岡山根拠地を残した。
黄洋界の守攻戦に於て、四ツの敵を打ち負かす偉大な勝利をかちとった。
1928.9月頃、毛主席は井岡山に帰り、黄洋界勝利のニュースを聞いて「西江月」の詩を書いた。
毛主席は2個大隊を率いて赤軍主力部隊を桂東県でみつけた。
その部隊のある大隊長 袁崇全は、1砲兵、1歩兵隊を率いてらうもつた。
（この項 P.29 参照）
1928.10月頃 毛主席はこの8月の失敗を顧りみて、省境区第2回大会を寧冈県 ニョウコウ 坪で開いた。
この大会の中心議題は二ツあった。

1、政党運動について
2、井岡山の斗いはどれくらい堅持できるか。

「中国の赤い政権は何故存在できるか」の論文もこのときのものです。
この後10月以降、次の四ツの論文をまとめた。

① 井岡山の斗い。
② 党内の誤った思想。
③ 星星之火可以燎原。
④ 中国の赤い政権は何故存在できるか。

以上の四ツの論文は、我党、我軍の基本的綱領となっています。
1928.12月頃、蒋介石は井岡山が完全に勝利するのをみて、第3次侵攻を企てた。
毛主席は1929.1.4. 寧冈県の白露で軍事会議をひらき、敵の撃破を検討した。
この会議で民主的に個人の意見をださせた。そして結論として、毛主席は井岡山の基地は必ず守るべきだが、機械的には守れない。敵の大部隊は井岡山に入ってくる。しかし敵の後方は薄い。ここに我軍の有利な条件がある。
そして、一部の部隊を井岡山に残し、主力部隊を福建省南部、江西省南部に進軍させることとした。
何故かといえば、

① 大衆を動員しやすい。

②江西省の東北地方に、才志敏に指導される新しい赤軍と相呼応できる。
③江西省南部、福建省は広い。敵は攻めるに困難である。
この地形を利用する。
以上の毛の正しい意見に全員賛成し、福建省、江西省に進軍した。
1929、1月中旬、赤軍主力部隊を瑞金＃集中し、残留する部隊には集中して敵に打撃を与えるようにと指示した。
主力部隊は福建省に3回往復して瑞金に革命政権を作った。
このときの革命政権の範囲は、20県、赤軍兵力は、20万、吉安市も解放した。
「木蘭の花」の詩にでてくる。——10万の兵は吉安についた。——は、このときのことです。
＃岡山基地に残留した部隊は、彭徳懐の率いる部隊で、兵江で蜂起した部隊でした。　毛主席の率いる主力部隊が第4軍が出発すると、第4軍に対抗するため第5軍を編成した。（彭徳懐が）
敵の攻撃に対しては、彼は流動作戦をとった。
王佐、袁文才の二人の連隊長のみが基地を守った。そして二人の連隊長は、大衆を動員して七昼夜戦いつづけ、敵を一歩も進めないようにした。　この長い時間を全て、赤軍は疲れた。（＃岡山の）
敵はゴロツキを売収して道案内とし、黄洋界の下から登ってきた。
小松にきて、赤軍病院の兵100名を殺し、40日間で人民を殺した。
しかし、後方のゲリラ戦によって敵を撤退させ、王、袁両隊長は山からでてきて基地を回復した。
この後、彭徳懐は仕方なく瑞金に行き、毛主席に噬の報告をしたので、毛主席は、彭徳懐を＃岡山に派遣した。　しかし彭は基地を全てすぐに流動作戦にでかけ、個人の野望を遂げるため、王、袁の部隊にも一緒に作戦に行かせようとした。　しかし王、袁は拒否した。
それでもなお、悪質な彭は、王、袁両連隊長（＃岡山省守備）を含めて会議を開き、また一部の（彼の云うこととき）幹部を策略によって殺しもした。　また デマ宣伝を流布し、——王、袁の二人はうらぎりをしようとしている。——と云った。
このように、
根拠地の広汎な人民は再び白色テロの中にあった。
これが第三の段階です。
これらのことから、革命半島はいつ、いかなるときにでも、毛主席の指導の下でやらねばならない、ということができると思います。
この8月の失敗と＃岡山を失うことは厳しい現実でした。
8月の失敗で赤軍の半分、基地の大半、組織の大半を敵に破壊された。
この回の（＃岡山）住民の家は壊され、焼かれた。
住民2,000人の半分は、このとき殺された。　そして残った人000人の人たちは暗黒な日々を過ごした。
貴方がた日本の友人は、私たちの先輩の血の跡をふんで歩いていたのです。
これらの失敗の根本原因は、毛主席の指導を離れたことにあり、冒険主義と流動作戦の誤りにあった。
例えば敵は5回の包囲攻撃を行った。
第1～4までは毛主席の軍事指導、革命思想によって勝利をえた。
敵はひどい打撃をうけた。
第5回に於ては、軍事、革命思想を失い、毛主席を指導の地位から下すことによって失敗し、このあと25,000里の長征に行かざるをえなくなり、30万の兵士が、延安では3万にしか残っていなかった。
また例えば、今日もし、Pro文革をやらなかったとするならば、どういうことになっていたか、想像できると思います。

（以上は13日午前中の講話）

〔Memo〕

今日は小雨のみぞれ様のはだ寒い天気である。
昨日の夕方から「井岡山斗争について」の講話は延々と続いて、
今朝は8時から正午までたっぷり、である。
しかし、井岡山の戦いは、三国志の物語りを聞くが如く、数多の
武勇伝ありで、~~[illegible]~~、大きな井岡山の壁掛け地図を前
にしての講話は倦きない。

午后は、この茨坪地区の旧跡 —— 新四軍本部、毛主席居住地
等。　又、敬老院を訪問。当時の老勇士たちの話をきく。

夜にラジオで、先日北京で収録した我々6人の座談会の第1回分を
聴く。　ぼくの出来ばえとしてはマアマアだと思う。

夜、この迎賓館の接待員の人たちの部屋（以前事務の控室、日本式
に云えば、イロリばたみたいなところ）で、マキを燃やして、即ち、
イロリばた論談みたいなもの。
原田君と二人で、通訳もなしに、手振り身振りで、筆談もまじえて、
結構通じる。
2年程前に、ここに毛主席がふらりとやってきたそうだ、~~革命~~
革命の建国後2度目の来訪らしい。?
3日経って、このホテルに泊り、（記念の部屋として~~[illegible]~~ベッドもそのまゝに
保存してあった）食事も特に普通の客用と同じ註文で、特別の接
待を断った。　そのときの毛主席の様子はどんなにしていたか、と聞く
と、毛主席は感無量の面持ちで、~~[illegible]~~涙を流していた、と云う。
とにかく、涙を一杯たゝえながら、この井岡山の40年以前のことを憶って、
戦跡の地を散策して歩き廻ったらしい。　そのとき新しい詩も作ったと
云うことだが、まだ発表されていない。
素朴に語るこの井岡山の人たち —— 語ってくれた接待員男女4～5人
の人は、30才前後の人ばかりで、いわば、革命戦斗当時の話は伝えぎ
きであるが、その人たちの話からも、2年程前にここを訪れた毛主席
の、老いて人間味あふれた姿、—— この井岡山の数々の戦跡と
当時の生き残りの老勇士たちとの再会に、涙を流している姿は、
それを素朴に語るこの人たちの言葉で十分だ、
その~~[illegible]~~来訪したときのホテルの前で、集った人たちと接しているときの
写真~~[illegible]~~
革命家が、その苦難の跡に立ちつくす写真は、公式の場での見慣れ
た主席の写真とは又違って、我々の心をとらえてはなさない。
（その写真を欲しかったが、なくて貰えなかった）

（黄洋界防衛戦に参加した55才の老人の話）

1928.8.30 毛主席の指導の下で偉大な性格をもった戦いでした。
黄洋界は、根拠地へ通ずる5ツの要路の一ツです。
ここには二ツの小径、―― 一ツは湖南省に、もう一ツは江西省に通じて
必ずここを通らなければならぬ。
敵は6個連隊を動員して黄洋界に攻めてきた。
赤軍は1個大隊の兵力で応戦した。
人民戦争の思想を以って井岡山の大衆を動員した。
この小井、大井の人々を組織して、児童隊、婦人隊を作って山に登った。
この外12才以上の者は1人づつ竹柵を作って路に埋めた。
二ツの道に通じる1.5Kmの範囲には全部これを埋めた。
準備完了してから、大きい石を山の上に運んだ。
赤軍は武器はすくなく、鉄砲1丁に5発の弾しかなかった。
30日、朝食のあと、湖南省側から敵はやってきた。
朝7時、山の中腹に敵はたどり着き、午前中4回の突撃をやった。
石を支えている下に敵がくると、綱を切って落す。敵は仰天して逃
げる。道の横に埋めてある竹を踏んでやられた。
我方は無傷だった。
午后になって敵は中腹で休んでいた。
我軍は1本の迫撃砲を備えて待っていた。弾は3発しかなかった。
夕方4時頃、2発打った。しかし温っていたので不発だった。
最後の1発は命中した。敵は多数の死傷者がでた。
我軍の志気は、これで高まり、敵に突撃した。
武器のない者は、石油カンに爆竹をいれて、バリバリと音をだした。
敵は、赤軍は午前中はすくなかったので、午后になって大勢の支援軍が
きたと思って退却した。
負傷兵、疲労兵は捕虜になり、敵は黄洋界の5Km下方の村で
野宿しようとしていた。
我方の一ツの小隊は、後方の山で再び撃ち始めた。
これをみて敵はあわてて湖南の方に逃げていったのです。
9月に毛主席にこの作戦の報告をした。―― この戦いはすばらしかった。
大衆を動員し、老若男女全員参加して敵を撃退した。
毛主席は十分に喜んで、「西江月」という詩を書いた。
―― 黄洋界の上で砲声が轟くとひびき、敵が逃げるのを報ず。
毛主席の人民戦争の教えにこそ、この戦いも、最も意義があったと思う。
こうして革命根拠地を守ったのです。

14日

井岡山(茨坪) —— 吉安(泊)

一夜明けて一面の大雪ふる

午前　A.M. 8 昨日からの講話の続き

正午前マイクロバスにて吉安へ出発.

大雪のため茨坪地区を抜けぬうちに車はスリップで、これでは峠また山から山への井岡山の天下の険峻を行くことはできない.

そこで除雪約30cmくらいの路ばたで、どうしようかということで評議を重ねる.——除雪しながらでも路をひらいて進もう.——も思想で困難と斗おう.—— 歩いて行けるところまでゆうう 等々.——

結局、地元委員会の4輪駆動のジープがあったので、それを試運行してみたら、何とか行けるので、マイクロバスは、ここに置きっぱなしにして、後日、吉安へ送ってもらうことにして、トラックジープに乗りかえ出発.

本日強りのトラックで、小雪の降りしきる中を寒風にさらされながら、井岡山を下った.

寒かったが、元気百倍しているので、この強行軍はとても愉快だった.

それでも、金先生ら工作員は、用務のこともあり、数日間井岡山の閉じ込められそうだとあって、ぶつぶつ気をもんだらしい.

本当に、本気で歩くことを決意して、ゴム長まで用意したぐらいだから.

茨坪の迎賓館前を出発するときは、昨夜談合した、接待員の人たちとすっかり仲よしになっていたので、記念写真をとったりして別れを惜しんだ.

4時前に吉安着.

(井岡山斗爭の講話の続き)

Ⅲ. 井岡山斗爭の歴史的意義

高潮 三ツ

低潮 三ツ

紆余曲折

a. 根拠地を作り始めた頃

労・農武装の方向が表われた.

三ツの県で政権ができ湖南、江西辺区労農政権をつくった.

武装革命
土地革命 } の発展

左翼冒険主義の3月失敗が起った.

b. 根拠地の全盛時代

軍隊が充実発展……1個師団 ⟶ 軍団

党組織も確立……地方の党員も1万人ぐらいに増えた.

湖南省、江西省辺区特別委員会の確立

土地革命の発展、軍事の充実

c. 低潮の時代

8月の失敗を挽回すること.

根拠地、党組織の回復.

土地法の制定

△ 毛思想は我々革命の指針である。
井岡山斗争から、その意義あるところを十分くみとってほしい。

△ 党内の誤った思想と斗争すること。
勇敢に思想で斗争しなければならぬ。

△ 井岡山根拠地斗争は、農村で都市を包囲する集中的表現である。
- 重点を農村におくということ。
- 日本では農民の占める割合がすくない。どうするかは皆さんの研究によることだ。
- 中国で農民を動員するということは、80%以上の勤労人民を動員することを意味していました。

△ 斗争の形態
- 武装斗争
- 土地革命斗争

△ 毛主席のM.L.主义に対する発展
青年時代からよく研究していた。従ってM.L.主义をうけつぐ、守り、発展させた。
実践に示されているように、根拠地を作り、軍事指導にも長けていた。
~~Bolgeois~~ Bourgeois が反革命となったとき、時をうつさずこれに対処した。

△ 毛主席の Marx、Leanin に於ける軍事学説に対する発展。
1、党の軍隊に対する指導。
- Marx は、proletaria の軍隊を組織できなかった。
- Leanin は、一つの軍隊を作ったが、そこに於て、如何に党は指導すべきかを解決できなかった。
- 一長制をいっていた。
- Stanlin は強力な軍隊をつくった。しかし、党が如何に指導すべきかを解決してない。ある面では党の指導を弱めた。
- 党委員会の集団指導に於ける首長制度
  ① ＿＿＿？
  ② 政治指導員制度
  ③ 政治工作制度

2、政、経、軍の民主主義
3、軍政、干兵、軍民一致
4、三大任務
① 大衆工作隊、② 自給自足の生産隊、③ 軍事
5、三大規律、八項注意
6、3・8作風

井岡山の確立は、革命の第一歩にすぎない。だからこそ遠くをみつめて、一点の火は燎原を焼くことができる。——星星之火可以燎原——といったのです。
これが、苦しみに耐えていた中国人民が起ち上った、毛主席を初めとして党中央指導の下に世界人民解放の強い後盾となった。我国解放斗争の出発点でもある。
我国解放の尊い宝（全顧）ばかりでなく世界人民の宝でもある。
各々の国の解放を斗かうには、井岡山の道を歩まねばならぬ。
各国の事情、条件は違っても、根本原理は同じです。
この井岡山斗争には、① 武装斗争 ② 土地革命 ③ 党建設 の三つの事がらが含まれています。

世界革命を広く展望すれば、Asia、Africa、L.Americaは農村に喩えることができる。
林彪同志が、――唯、農村ノミガ総テノ活動ガ活動ヲ行フ陣地デアル。――と云っています。
井岡山は包囲を幾重にも囲まれ、攻撃された根拠地である。
ちいさかった軍隊は、最初1,000人の兵士と、簡単な槍、銃だけだった。　これが次第に発展していったのです。
これも党内の誤った思想とくり返し闘争してきた所産です。
皆さんは、はるばる全世界の津々浦々からやってきた。
毛主席が云っているように、日本は日本人民のものです。
幸福がよく解放の闘いを進めて下さい。
井岡山の我々人民も、強い後盾となります。
国際団結を固くガンバリましょう。
すべての帝国主義、反動派をせん滅しましょう。
搾取と戦争のない社会を作りましょう。

15日

吉安――南昌

正午頃、吉安から自動車3台に分乗して南昌へ戻る。
午后、先日の陶器店へ又買物に出る。
今度は、先日程群集に囲まれることはなかったが、それでもかなりの人と、

〔金蘇城 先生 lecture〕

△ 党規約 31条 (党全国大会について)

全国代表大会の任期は5年

1. 中央委員会は毎年1回開くことを原則とする。
2. 〃 特別な場合は延期及び繰上げて開くことができる。
3. 1/3以上の委員、又は1/3以上の省(28個)、特別市の組織の要求があれば開く。

- 省委員会の任期は3年、
- 県 〃 2年、

△ 中国共産党々員数

第8回大会現在(1956.9)

- 在籍党員 10,734,384人
  - 総人口の約 1.74%
  - 党員の内女性党員 約10%

- 党員出身階級別 %

労働者出身	1,502,814人	14 %
農民 〃	7,417,459	69
知識人 〃	1,255,923	11.7
その他 〃	558,000	5.2

- 第7回大会(1945)在籍は約1,210,000人

従って第7回大会以後、第8回大会までに入党したものは90%を占める。

△ 中国共産党全国大会の開催

第1回	1921	
2	22	
3	23	
4	25	
5	27	
6	28	モスクワにて
7	45	延安にて
8	56	

※実質上大会に替るものとして、中央工作会議を多いときには年2〜3回も開いている。

——中央の各部門、中央委員、各省責任者で構成員。

△ 新らたな段階での運動

1952年	3反5反運動
56	合作社 ⟶ 高級合作社
57	反右派斗争 (右派分子の巻き返しに対する反撃)
59	右翼日和見主義反対斗争 (彭徳懐事件) (三自一包)
63	四清運動 (社会主義教育運動)
65.11	文化大革命 イデオロギーの革命

△ 中日友好協会

名誉会長 郭沫若
会長 廖承志
秘書長 趙安博
副〃 王堯雲
常任理事

△ 中国人民外交学会

顧問
会長 張鵬翔
副会長
秘書長 王蔭圃
副〃 尚何荊
補佐 金蘇城
常任理事 趙安博
孫平化
謝南光
王堯雲

△ 対外文化友好協会

△ 平和委員会

会長 郭沫若
副会長 刘寧一

△ 学習の基本的テーマ

- 共産党組織論
- 干部問題
- Boulgois 反动路線
- 教育
- 文芸路線

△ 必読

- 人民内部の矛盾を正しく処理するために
- 中国共産党全国宣伝活动会議に於ける講話

△ 紅旗 1967年元旦号社説

—— 革命に危害を与える誤った指導に対しては、無条件にそれを受け入れるできでなく、ボイコットすべきである。

毛思想の組織
政治) 原則

何が危害を与えるかの基準

「人民内部の矛盾を……」第8章に 6項目の基準を示している。

諫录 S. 372
レーニン全集 34巻